

津輕野の雪

北畠八穂



朝日新聞社

輕野の雪

甲八穂



一九八二年十二月二十日 第一刷発行

定価一六〇〇円

津軽野の雪

著者 北畠八穂

発行者 初山有恒

発行所 朝日新聞社

〒104 東京都中央区築地五―三―二

電話 〇三―五四五―〇三―一（代表）

編集・図書編集室 販売・出版販売部

振替 東京〇―一七三〇

印刷所 図書印刷株式会社

目次

ふるさとつがる	
雪と降る草花の魂	11
津軽のねぶた	15
私の子供のころ	20
母の信仰	24
詩人モヨ	28
詩の知恵つき	32
半世紀前の青森	40
ふるさとのゆめ	45
津軽の雪	48

津軽さしこぎん	52
津軽の初荷	56
ジャッキとセツペエ	59
つがるのいたこ	62
つがるさま	65
キュウたておどさま	68
岩木山のお札売り	71
つがる手おり	74
つがるの大福小福	77
津軽かいの汁	80
津軽衆の念力	83
津軽のモッコ	86
浅虫の御本陣	89

津軽むかしこ 92

足の無い旅

津軽十和田湖 97

足の無い旅 101

たのしむ病人 111

病 氣 119

魂の財産づくりを

魂の財産づくりを 125

百の説法より 128

こころの調律 132

美しさは時とともに

136

新しく思うこと 141

津輕の婆さま

身にしみる老いゆえ 147

ついの住家 150

雪の中の春蘭 153

老いの日常 156

かなしみのそこからはかる

159

素直に老りたい 162

津輕の婆さま 165

菓子売リンバサ 168

叔父姪夫婦 171

砂利場のじい 174

老いめかしい雅 177

カナイト売りじさま 180

お留守番老女 183

ヤツチャアメじさま 187

老ったボサマ夫婦 190

もうけ上手婆さま 193

腕はまだある大工の爺さま 196

しぼりかす 199

貧乏をなつかしむ老夫婦 202

旧家のごいんきょ 205

鯉漁場の家霊を守る老女 208

北畠八穂、その死、人と文学

白柳 美彦

装 装
幀 画

熊 棟
谷 方
博 志
人 功

津輕野の雪

ふるさとつがる

雪と降る草花の魂

津軽海峡から八甲田の嶺へ、ズッキラと骨のずいをさす冷たい風が吹きとおる夕方、その風にチラチラ白い片がまじります。

「ウァ、空のワタ花っコ、ワタ花っコ」

津軽の童らは、この初雪を、天の綿の花がさいたと、かじかむ手指を口もとによせながら、季節の変るのに勇みたちます。

その日から寒さが日日にまして、家の中にはいよいよ強く火が燃され、きびしい外の寒気とは段違いになるから、しきりの硝子戸には、湯気が太古の草花の象かたちに凍こおりつきます。

そこに、童らは、ぬくめた指で、字をかき、絵をかき、

「大昔、消えた、大昔、消した」

と、現うつつの招き手になったつもりです。

六つの花びらをもつ雪は、綾に降りながら、白い花花の幻をえがきます。

まず野一面に咲く三つ葉の質素な白い花、みごとでもなく、匂いもかすかな、指の先の丸さの

花なのに、童には妙に親しまれます。

長い茎ごと出来るだけ沢山つみためて、二本ずつよせて、花くびのところで順順に重ねて編みます。

編んだ長い花のくさは、くびかざりにかけ、頭へまいて冠にします。

花の冠、花のくびかざりをした童の群は、ゆくぞ、せめるぞと陣とりをしたり、へここは、どこのほそみちじや

の、列になったりします。

この三つ葉の花の、茎と茎をからませて、両方から引きあい、切れた方がまけの、花ずもうもやりました。

花くびだけでもいだ三つ葉の白い花を、いくつか握った手をうしろへまわし、

「何個」

と、あてっこもしました。

白い丸い花だから、花人形のくびにして、葉っぱの着物をきせ、いくつもつくってならべ、名前をつけたりもしました。

もちろん、ママゴトのママにもしました。可愛い土鍋やお釜に入った、むしられた三つ葉の花は、軽すぎて、おもちゃのしゃもじでは、よそいくくこぼれました。

三つ葉の花につづいて、降る雪の中にみえているのは、アカシアの花房でした。

大川の洲にずらりと立つアカシア並木、門口におおいかぶさるアカシアの太木。飛びついて、むしりとりるアカシアの花房は、やさしく、涼しい母の匂いがしました。

ヒタイに巻いた鉢巻に、アカシアの花房をはさんで、未開のくにの首長になったつもり、花房から花をしごきとって、パアッとまきまき、花のこみちをつくって、その上をわざとふんで通りぬけ、王様の行列のつもり。

日ぐれが早まって、早寝になり、藁ぶとんに、コタツで暖めた小ぶとんを重ね、夜着を深深と被って、埋まる具合にねた足許には、湯タンポがあり、屋棟にウオッと吹雪がほえる晩おたがい素裸でねた祖母に、童は、

「うなりッおっかねの、おばアさま」

「なんの、なんの、あの吹雪はよ、今年生れてくるもの達の魂をはこんできてるのし」
「ソウ、タマシの」

耳をすます童は、降りつんだ地の雪をまき上げ、うずまいて吹雪く白龍のすさまじさを想い、いっそう祖母にだきついて、

「おばアさま、白うさぎ、白梅、白桃、リンゴ、梨の花のタマシも、か」

雪消えのかげろうがたつのを待ちかねて、一時期に咲く花を数えあげます。

「あい、し、ンだもなも、愛子コヤ」

祖母は、童をなでて、いとおしみます。

ほえる吹雪をきく童の耳から、目の奥に、白い花の蕾がひらきつづけます。

雪色の花ばかりの中に一輪、紫こいスマレを咲かせてみます。よしと、その数をふやします。スマレは、束にして、笹舟にのせ、

「海の主に」

水の色の素と匂いをおくると流すのでした。スミレの花つぼをさいて、ミツを吸い、

「これ毒」

毒に唇をつけたトキメキを味わいました。

毒を吸った気の童は、もひとつ残忍に、スミレの花をつぶして、爪を染め、

「龍のうろこ、獅子の爪」

グワッオ、ヒュウととどろく、ものすごい吹雪から、童は、その吹雪と共に降ってくる、今年生れるものの魂をさきとり、その魂達をうけとるしとねに、まず花花の魂をうけとったのでした。

想いに咲く花花の香にトロリと酔って、ねむりにのめりこみかける童に、

「明日、目がさめたら、木樹に樹氷の花を」

きらめかすと、吹雪は約束しました。